



社団法人

海外と文化を交流する会

(社) 海外と文化を交流する会会報

2005年3月発行(3月1回発行)

第26号

”知と心”の繋がりに文化の原点を求めて

日本を理解し日本で学ぶ留学生への支援 貧しい国々での医療活動を支援 各国大使館との協力などによる文化講演会の主催

事務局 〒151-0053 東京都渋谷区代々木 1-27-6 11ビル内 TEL&FAX 03-3370-7654

巻頭詩

リンゴ

まど・みちお (詩人・児童文学者)

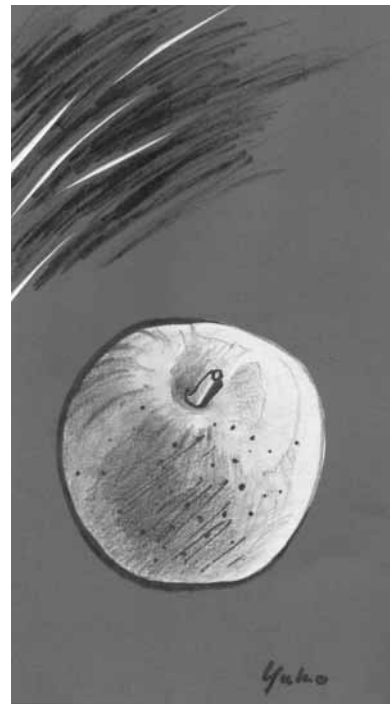
まど・みちお：明治42年山口県生まれ。台北工業卒。国際的な評価も高く、「アンデルセン賞」その他数多くの賞を受賞。著書に「ぞうさん」(ぞうさん ぞうさん お鼻が長いのね……)や、「まど・みちお詩集」「宇宙のうた」ほか多数。動物に関する詩20編は美智子皇后が英訳するなど、話題になりました。掲載の詩は、作者の快諾を得て転載しています。

リンゴを ひとつ
ここに おくと

リンゴの
この 大きさは
この リンゴだけで
いっぱいだ

リンゴが ひとつ
ここに ある
ほかには
なんにも ない

ああ ここで
あることと
ないことが
まぶしいように



海外と文化を交流する会からのメッセージ

今年度の展望と抱負

大谷俊介（電気通信大学レーザー研教授・理学博士・
社団法人・海外と文化を交流する会常務理事・会長代行）

「海外と文化を交流する会は何をする団体なの、どういう文化を交流するの」と時々、人に聞かれるが、私にははっきりと答えられない。「今はいろいろなことをしていますが……その文化の種類と形も検討中で……」などと語尾を濁らす。そこで、当会が何をやっているかを知るために、平成 17 年度事業計画書案を見ると、そこには例年とあまり変りなく、講演会を含む会員同士の親睦会やチャリティ・コンサートを開き（今年度は 12 月 9 日に霊南坂教会で「日本のトップチェンバリスト中野振一郎チャリティコンサート」を予定）、そこで得られる収入と会費を原資として、バングラデシュで献身的な医療活動を続けている宮崎亮医師を応援し、日本で勉強中の留学生を支援したりと、さまざまな活動が盛り込まれている。「この会では“文化”を芸術、教育、健康がバランスよく組み合わせさせたものと理解している」と計画書には謳っており、確かにその線に沿った活動形態であるということもできるが、やはり少し“あいまい”であり、シャープに的が絞られているとは言いがたい。

数年前まで、私は学者の国会とも言われていた（今では情けないぐらいに骨抜きにされてしまったが）学術会議という組織に関係していたことがある。その時に、実生活に役立つ学問である「工学」分野の人からいつも厭味を言われている、役に立たない学問分野の「理学」者たちが、「文化としての学術」を考える委員会を作ろうと呼びかけて、自分たちのアイデンティティを主張しかけたことがあった。要するに、自分たちの“なりわい”は、ものの役には立たないがひとつの文化活動である、と言いたかったのであろう。そうしたら、ある人文科学の偉い先生から、「文化には 50 をこえる定義がある。そのどれを指すかを明確にせよ」とのきついお言葉があり、それを呆然と聞いた覚えがある。

たしかに、文化には衣文化、食文化、住文化があり、一方で宗教文化や農民文化などとの言い方があり、縄文、弥生文化もあれば、「今やオセアニア文化は国際文化の中で無視できない」と言ったりもする。文化人がいて文化庁に働きかけて重要文化財を決めるかと思えば、文化人類学という学問も流行である。果ては、文化住宅に住み文化包丁を使い魚の文化干しを食べ文化的な暮らしをしている人たちがいる。まさに文化、文化であり、それが氾濫し、「文化」の定義、言い回しも斯く斯様に多岐にわたっている。

美術研究の泰斗、八代静雄氏は昭和 23 年（1948 年）に「世界に於ける日本美術の位置」という名著の中の前言で、「文化の意義は甚だ茫漠として、広くも狭くも解せられ、また横道に

それ、誇張され、歪曲されやすく、つきつめていえば、何を意味するかわからない」と書き、「世に文化の名に於いていかに猥雑なる遊び事が濫行しつつあるか、考えるだけでも憂うつになる」と嘆いておられる。この発言が敗戦直後になされたことに驚き感服するが、それはともかくとして、この時から20年後に設立された当会のなした文化交流事業は、八代氏の謂う「猥雑なる遊び事」ではないのは後述のように明らかではあるが、その意味するところのひとつは、要するに「文化」はもともとあいまいな言葉だったのである。そのあいまいさの中から、我々は「芸術、教育、健康」をキーワードとして選び、焦点は多少ボケているのを承知しながらも、いろいろな方面にわたってボランティア活動を真剣に続けてきた。

今、日本には2万をこえるNPO（非営利組織）とNGO（非政府組織）があり、その大部分は草の根的なボランティア団体である。何をやっているかといえば、少年サッカーチームの育成だったり、犬の散歩代行、多摩川での鮭の稚魚放流、森や海岸を美化する環境保護や、老人介護やホスピスなどの身近なものから、侵略戦争で親を失ったイラクの子どもたちをすくう活動、アフガンに小学校や病院を作ろうとするものなどの国際交流活動を含め実に大きな広がりを見せている。そして、それらの規模はまちまちであっても、その全てがシンプルでシャープ、わかりやすい目的を持った活動である。そこに参加しようとする人たちも、その設立の趣旨に賛同し、はっきりとした目的意識を持って入会していることであろう。

このようなNPO/NGOのボランティア団体と我々の会は何が違うのであろうか。形の上で明らかに違うのは当会はNGOではなく、外務省認可の社団法人であること、しかし、最近になり骨組みができた公益法人改革案によれば、官庁認可の社団、財団法人は近ぢか民法を改正して廃止され新しい非営利法人制度の中に組み入れられる。そうなると、総勢数万となった法人は皆同列となり、その中でそれぞれがおのれの存在意義を主張することになる。その時には、我々の会も現行のあいまいな活動形態をそのまま続けてはいられないであろう。

このような状況の中で、私たち、会の活動実行部隊は、会員の方たちと相談しながら、今年1年かけて、「海外と文化を交流する会」はこれから何をしていくべきか、社会貢献にどのように参画していくのか、また、会員にとって、入会して良かったと思える会、そして、活動に参加することが自分たちの生きがいになるような会にするにはどうしたら良いか、を考えることにしたい。

その中で、判りやすいひとつのやるべきことがすでに決まっている。それはいずれどこかで詳しく紹介されると思うが、当会が昭和52年（1977年）にオーストラリアに寄贈した日本画25点を、2006年が日豪交流年であることを機会に、現地で再び展覧することを計画している。この会の創設者、松岡朝女史が5年以上かけて各方面に働きかけ、25人の日本画家（そのうち文化勲章受章者が8人）を、「日本のことをもっと理解してもらうためオーストラリアに現代日本画を贈ろう」と口説いて、特別に一枚ずつ描いてもらい、それをプレゼントしたのであった（毎日新聞記事によれば当時の時価総額1億5千万円）。

おわかりでしょう。そうなのです。この会の設立趣旨は、日本と海外諸国との文化交流を美術を通してはかり、国際理解と親善をより強いものにしよう、というものだったのです。我々の会で謂う「文化」は、はじめははっきりと「美術」、それも日本画でありました。実にシャープではないか。しかし、こんな事業はこの先もうできないであろう。

我々は今、この会の行き先をどこに定めようかと、もがき苦しみながら考えている。その中で、いち度原点を見直して、この「日本画再展覧会」を実現させる努力をしよう、その道の中

から何か新しいことが見えてくるのではないかと期待している。

この日本画寄贈の大事業があったにもかかわらず、世界美術の中での日本画の位置はあい変わらず高いものではないし、理解も浅い。事実、オーストラリアにおいても、寄贈された国宝級の日本画の価値を理解できずに、現状では、一部倉庫に眠ったままだったり、役所の職員室に掛けられていたり、その扱いがお粗末である。このような事になってしまう原因のひとつは、前述の八代氏も指摘の通り、日本人の心の反映としての美術を、これまで世界に理解してもらう努力を怠ってきたからなのではないだろうか。日本庭園の庭石を見る時、置く時に、地上に出ているのはごく一部でありながら、地中に深く見えない底の部分が埋まっていることで、重くどっしりと感ずる心と感じさせる技法、絵画でも余白の空間を強調する手法など、すべてを濃密に、写実的に表現するのではなく、見えない部分や余白が、深みや余韻となり、それが日本の美に閉じ込められている、というような奥ゆかしさに満ちた日本的な感性と表現を、ここで再び世界にアピールするのも良いのではなからうか。

国際交流におけるひとつのゴールは、こちらの心を見せ相手の心を知ることによって相互理解を深めることにあるとすれば、今年、来年とつづく寄贈日本画を廻るこの会の活動は、日本の心を見せ説明することであり、真の国際交流となる良い機会であると考えます。

最後に一言。今、私と中野真逸郎理事は幼なじみの友人を巻き込んで、オーストラリアにおける日本画展覧会を実現させようと、松岡裕子専務理事と相談しながら作戦を練りはじめました。昔の悪童が無教養にそのまま年寄りになってしまった私たちは、もちろん日本画のことをほとんど知らないため、あわててにわか勉強をはじめたところです。老人力も結集すれば、それなりのことができることを見せたいものです。また、心強くも商工会議所、外務省の関係するお歴々も親身になり応援してくれています。そして、会員の皆さまにご協力いただく日がまもなくやってくると思います。

どうぞ、よろしくお付き合い下さい。

会の第3フェーズに向けて考える

佐藤純一（国際メタテクノロジー研究所・工学博士・
社団法人海外と文化を交流する会顧問）

一昨年、室井会長との機縁で顧問にさせていただき、理事会に参加しながら、当会の活動のこれまでの業績を知り、これからの21世紀の方向を会の初志を新しく展開する視座で考えてみた。まず、出発からの第1フェーズは、日本が第2次世界大戦後の平和国家としての復興にあたって、日本人のこころ、日本の文化について絵画芸術をメッセージ媒体として真の理解を得ることに力を入れた。やがて戦争の廃墟から立ち上がり、工業国への仲間入りを果たし、海外と自由に、双方向的に交流することが出来るようになった。陸上競技の3段跳びで言えば、ホップに譬えられる段階である。

次のステップにあたる第2フェーズは、それまでの方向からの大きい転回を考え、海外から日本という向きを転じて、日本から海外へ向けての意識の矢を強く持って、ボランティア活動とくに海外で文化、教育の領域で寄与することを新たな活動として続けることを打ち出した。

しかも、その実施に当たっては、援助する側・援助される側、与える側・与えられる側ということではなく、水平な目線で、イコールパートナーの精神で、共に行うという精神にたっていることを継続してきた。こうした中で、例えばバングラデシュへの医療支援、海外留学生へのプレゼント、日本に滞在する留学生との交流会等を行い、しかもその資金は国や産業界の援助等には本来的に拠りかからずに、自分たちの会費やチャリティーコンサート等で得た収入に基づいて、苦しくとも小なりといえども自分の足で立っていくことをモットーとしているのは、誇りにし得ることであると思う。

さて3段目のジャンプにあたる第3フェーズは、如何にしたらよいだろうか。戦争と革命の20世紀が閉幕し、新しい世紀はいよいよ平和の世紀との願いも空しく戦争とテロで幕を開いた。かたや「左手にバイブル、右手にライフル」、こなた「左手にコーラン、右手に剣」、これでは平和の訪れようもない。人は手には何も持たず、ただ左手右手を合わせて祈り、願い、誓う、そのレベルで互いのところが交わされることの大切さを今ほど思い起こし、実践しなければならぬ時はない。そして、この「無垢のこころの交流」は、教義、論理のぶつけあいではなく、文化を媒介にする市民レベルでの自発的な、日常的活動によるしかありえないと考える。そして、富めるもの、貧しいもの、それぞれが自分のできること、ものを捧げることが、地味ではあるが王道である。まさに、海外と文化を交流する会の出番のフェーズであり、このころでこれからの活動に手を携えていこうではありませんか。

立命館アジア太平洋大学における留学生の現状

伊藤泰敬（立命館アジア太平洋大学教授・
社団法人海外と文化を交流する会会員）

ご報告の前に、小生の勤務する立命館アジア太平洋大学（以下 APU）の学生への、昨年および本年の各1名への奨励金の授与につき、会員の皆様に改めて深く感謝の意を表します。ありがとうございます。

APUは2000年4月、アジア太平洋学の確立をめざし、大分県別府市に設立された国際大学です。社会学系のアジア太平洋学部、経営学系のアジア太平洋マネジメント学部の2学部およびそれぞれに大学院を擁し、学生数は4,132人と小規模ですが、他の日本の大学にない特徴は、留学生（当学では在留資格が「留学」である学生を国際学生と呼びます）が1,794人と全体の43%を占め、またこれらの学生が75カ国と多数の国から来ていることです。キャンパスへの訪問者は、見た目からも実に多種多様な学生がいることに驚かれます。

APUに在籍するこの留学生数によって、大分県は東京に次いで、全国で2番目に留学生が多い県にランクされています。留学生の人数が多い上位5カ国は、順に韓国、中国、台湾、ベトナム、インドネシアです。国別の分類では、アジア諸国が86%と多数を占め、アジア太平洋地域（アメリカ、オーストラリアなどを含む）では9割強になります。大学の公用語は日本語、英語の2カ国語で、授業はこの両方で行われます。教員数は205人、うち外国人が95人で、学生とほぼ同じ構成になっています（上記は2004年11月現在）。キャンパスは別府市の中心からバスで約30分程度の高台に位置し、周囲には人家も、ましてや商店、飲み屋もなく、

勉学の環境としては抜群です。学内には生協とカフェテリアがありますので、普通の生活には困りません。敷地内に A P ハウスという学生寮があり、約 700 名弱の学生が居住し、そのうち留学生が 600 人強です。ここに住めば、通学の交通費もかからず、生活費も安く済みますが、一方市内でのアルバイトや買い物などに行くにはバス代が片道 500 円程度かかり、不便と言えたいへん不便です。教職員のほとんどは車で通勤します。

奨学金に関連する学生のお金の問題ですが、まず授業料についてご説明します。当学では、アメリカなどの大学で用いられている単位制授業料を採用しています。1 年間の授業料は、授業に参加するために必要な固定授業料と、登録した単位数に応じて必要な単位制授業料で構成されています。2005 年度は固定が 557,000 円、単位制が 19,500 円です。もし、学生が 1 年間に 32 単位を受講登録すると、年間では 1,181,000 円かかります。ちなみに日本の 4 年制大学の規定単位数は 124 単位です。なお、入学金は 100,000 円です。総額では、日本の私学の平均的なレベルと思います。A P U では留学生のみを対象にした授業料免除の A P U 奨学生制度が運用されており、それが国際学生を誘引できる大きな要素となっています。1 種 100%、2 種 65%、3 種 30% の免除（入学時および入学後の成績による区別）を受けている留学生は、留学生総数の 4 分の 3 にも上ります。

一方、日本での学生生活の最大の障害は、他国に比べての高額な生活費です。個々の学生の生活費はピンキリですが、アパートやマンションなどを借りて住む場合、10 万円前後というのが日本の標準ではないでしょうか。勿論、大都市ほど住居費が高い傾向、またそれによって生活費が高くなるのは、周知の事実です。下記に、住宅費を除く 1 カ月の生活費についての A P U の学生に対するアンケート結果を引用します。（結果は 2003 年度調査）

学生の区分	国内学生	国際学生
3 万円未満	17%	25%
3 万円～5 万円	45%	40%
5 万円～7 万円	22%	22%
7 万円以上	16%	13%

ご覧のように、留学生のほうが 3 万円未満の分類に多数います。また、7 万円以上は少し少ない傾向で、平均は算出していませんが、留学生のほうが明らかに少ない生活費で暮らしていると推察できます。では、生活費をどのように工面しているかについて、数字続きで恐縮ですが、同じくアンケート結果をご紹介します。

学生の区分	国内学生	国際学生
奨学金のみ	7%	15%
主にアルバイト	13%	29%
仕送りのみ	51%	33%
ほとんど仕送り	29%	23%

国内学生の親のすねかじり（仕送り）に比べ、かなりの留学生が奨学金やアルバイトに頼っている、あるいは頼らざるを得ない現状がうかがえます。

奨学金制度は、他の留学生同様に、日本政府（文部科学省）による奨学金、日本学生支援機構による私費留学生への給付、地方自治体および国際交流団体の奨学金、民間企業や団体の奨学金など、かなり多彩です。これは日本の留学生全般についてのデータですが、私費外国人留学生の 3 分の 2 弱は何らかの奨学金を受けており、その平均月額額は 73,771 円で、これは学費

を含む1カ月の生活費150,854円の半分に当たるという結果もあります(1997年財団法人日本国際教育協会)。

冒頭に記した、当会で今年奨励金を頂いたパプア・ニューギニアの学生の場合、同国の国費留学生として来日しています。授業料は先に述べた1種で全額減免を受けており、また生活費は月額8万円と報告していますが、その半分は母国の奨学金、また半分は当大学での学習奨励金(上記の日本学生支援機構の大学経由での給付)です。当人は母国で大学卒業後、中学教師をしていたのですが、さらに留学によって研鑽を深め、将来は大学院まで進み、故国に帰って高等教育に携わりたいとの目標を持っています。同国からは現在7名が本学に来ています。授業料の減免を継続的に受けるため、成績はたいへん重要で、アルバイトの余裕もなく、慎ましく勉学に勤しみ、日本での留学を実り多いものにしようと励んでいます。こうした学生が母国に帰り、わが国にとってのよきオピニオン・リーダーになってくれるものと大いに期待しています。

この拙文が、当会の貴重な留学生奨励金の給付のあり方について、会員の皆様にお考え頂く一助ともなれば幸いです。

会からの報告 & お知らせ & お願い

中越地震募金ありがとうございました

秋のチャリティコンサート会場で、おりからの中越地震被災者への募金をよびかけたところ、80,455円の寄付がありました。寄付をくださった方々に厚くお礼申し上げます。この募金は、朝日新聞社「朝日福祉基金」をとおして被災地に寄付いたしました。2月24日付朝日新聞第2東京面で報告されています。

天使のヴァイオリン川畠成道チャリティプログラム訪問先募集

昨秋、海外と文化を交流する会主催の秋のチャリティコンサートですばらしいヴァイオリンをきかせてくれた川畠成道さんは、福祉施設などを訪ねるチャリティプログラム「生命の輝き」の訪問希望施設を募集しています。訪問先はホスピス、こども病院、養護施設、障害者施設、養護学校、少年院など。対象地域は北海道、東京、神奈川、千葉、埼玉、京都、大阪、兵庫、鳥取、愛媛、福岡、熊本の各都道府県。問い合わせ・申し込みは朝日新聞厚生文化事業団「生命の輝き」係(03-5540-7446)。

会員親睦食事会

これまで、会員同士の親睦を深めるといった活動については、すこしお休みをしてい

ましたが、式次第など無関係に、気軽に、気楽に、食事でもしたい、という声があがってきました。12月には会費制で、東京麹町のレストランでランチをとりながらの親睦会をしました。秋には、東京代官山のレストランでランチを検討しています。お問い合わせは事務局まで FAX あるいは e-mail : jimukyoku@kaigai-bunka.org まで。

寄付をいただきました

次の方々から当会へ寄付をいただきました。ありがとうございました。有意義に遣わせていただきます。

山縣絹子さま

会費納入のお願い

2005年度の年会費納入をお願い申し上げます。2003年度2004年度の年会費未納の方は、ぜひともご納入ください。高く評価されている当会の活動は、皆さまのご支援あってこそなのです。

郵便振替 00130-2-366249 社団法人海外と文化を交流する会

銀行振込 東京三菱銀行渋谷支店 (普)2266599 海外と文化を交流する会

会費 10,000円(正会員) 5,000円(特別賛助会員) 3,000円(学生会員)

海外と文化を交流する会事務局

〒151-0053 東京都渋谷区代々木1-27-6 パイビル内

TEL&FAX 03-3370-7654 e-mail:jimukyoku@kaigai-bunka.org